

へき地小規模校の理念と実践：教育活動に活かそう

平嶋，一臣
純真短期大学こども学科

<https://doi.org/10.15017/1560865>

出版情報：生活体験学習研究. 15, pp.75-76, 2015-02-15. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

『へき地小規模校の理念と実践』

— 教育活動に活かそう —

監 修：玉井康之

編 著：二宮信一・川前あゆみ



へき地小規模校と生活体験学習。読者はこの両者間のリンクをどうイメージされるであろうか？ 仮に読者が都心部に勤務する教師であれば、本書のタイトルを目にした時、多分に「へき地校・小規模校だから、容易に体験活動が可能なのであろう」と、その内容を想像されるかもしれない。と同時に、「中央・市街地・大規模校勤務の自分には、得るべきところは…？」と、本書への先入観を持たれるかもしれない。

そのような考えを払拭させてくれる著書である。

なぜなら、本書はそのタイトルにもあるように、単に「へき地校」のみを対象に論じたものではなく、併せて「小規模校」について、全章にわたりそのパラダイムの転換を、さまざまな角度から具体的かつきめ細やかに論じているからだ。

今や小規模校は「へき地」に限らない。私の現在の勤務地は150万人都市・福岡市だが、そこでも統合の計画が進んでいる小規模校がある。したがって、本書はへき地校に勤務する教師のみならず、都心部に勤務する教師にも是非手にしてもらいたい。

必ずや、監修者・玉井氏が一貫して説いてきた「へき地小規模校教育のパラダイム転換」の本質がどこに在るのか、ということに気付くであろう。と同時に、市街地・大規模校の教育に「遅しく生きぬく21世紀の教育のあり方」の再確認をもたらしてくれるはずだ。

監修者・編者・執筆者の8名は、いずれも北海道でへき地小規模校教育に長年携わってきた教員である。それだけに、その研究の成果は、かつて「へき地教育こそ教育の原点」と、これをロマン的な解釈で終わらせがちだった教育界に一石を投じている。それはへき地小規模校教育の在り方を根本から洗いだし、科学的・構造的に分析しているからにほかならない。まさにコペルニクスの転回による発想が随所に著されている。加えて、その章立てと各章の整然とした著述内容の分かり易さは、8名の執筆陣の見せるチームワークのなせる技とも言える。

本書の構成は次の通りである。

はじめに

第I部 へき地教育のパラダイム転換を推進する地域学校運営

第1章 現代の教育政策におけるへき地小規模校教育のパラダイム転換の可能性

第2章 へき地小規模校経営の特性と学校・地域協働運営の可能性

第II部 少人数の中で集団性・社会性・生きる力を育む学級経営・生活指導

第3章 社会性をはぐくむへき地小規模校の学級経営の基本的観点と課題

第4章 集合学習・交流学习と社会意識の育成

第5章 へき地小規模校の農林漁業・自然体験活動と生きる力・心の教育の可能性

第III部 へき地の地域素材・自然環境・地域産業を生かす学習指導

第6章 へき地小規模校における少人数・複式授業運営の基本的観点

第7章 北海道のへき地の特性を活かした地域教材開発とカリキュラム開発の必要性

第8章 へき地小規模校の地域特性を活かした総合的な学習の可能性

第9章 へき地小規模校における持続可能な食

育・農育・教育の展開と可能性

第Ⅳ部 へき地の地域ネットワークと小集団を活かす特別支援教育

第10章 社会資源の少ない地域における特別支援教育の推進と教師の立ち位置

第11章 障害のある子どもと地域をつなぐ教師の役割

第12章 「特別な教育的ニーズ」とへき地小規模校における小集団を活かした授業づくり

第Ⅴ部 へき地教育を担う若手教師の成長とへき地教育プログラム

第13章 山村留学生指導を通じた若手教師の成長の意識

第14章 へき地教育実習の位置づけと内容特性

第15章 へき地教育プログラムの構造化の意義と担い手教師の成長

おわりに

第Ⅰ部は、管理職自身がへき地小規模校の良さに気づき、それを教職員に鼓舞し良さを発揮できるアイデアと実践を持ち寄ること。また、地域協働運営を推進できる可能性を持っているのも、へき地小規模校の積極面である、と論じる。

第Ⅱ部は、少人数イコール社会性を育む上でのマイナス要因と見なす考えからのパラダイム転換である。少人数だからこそやれる・育てることができる、全員役割・全員責任の学級活動・学校活動・地域活動ができる。授業での発言・発表の機会が多く参加感のある授業運営・体験活動が容易であり、忍耐力・持久力・人間関係づくりによる「生きる力」を育むと説く。

第Ⅲ部は、少人数であるからこそできる参加型の授業運営や地域の素材・自然・農業などを生かした教育活動が可能であること。自己学習活動や調べ学習・集団学習を取り入れこれを展開することで、自己教育力・自己学習力を育むことができる。また、

教える授業展開から自分たちで調べ、学びあい、教え合う共同学習の方法も求められていると、へき地小規模校教育の持つアドバンテージを説く。

第Ⅳ部は、地域ネットワークと小集団を活かす特別支援教育について論じている。すなわち医療関係者・福祉関係者・教育相談員の少ないという一見マイナス要因の視点を変え、地域全体が子どもたちを包みこむ条件があると考え直す。そこから協同的な授業作りを行い、すべての子どもの特性に応じた学習指導を求めらる中で、子どもたちどうして支えあう小集団学習を活かした授業に導くことができると説く。

第Ⅴ部は、へき地小規模校の将来の担い手である若手教師の意識を分析しつつ、へき地小規模校にある教師の成長のための条件について論じている。また、最近試みられるようになった山村留学の中で、成長していく子どもの様子を捉えている。また、これを見つめる若手教師が、へき地小規模校の良さを認識し成長していく過程を、教育実習中の姿やインタビューなどで具体的に紹介する。

このように、本書は全章を通してへき地小規模校のイメージとして持ち易い「恵まれない環境」という考えから、むしろその特性を活かす新しい教育活動の創造を行うことの可能性を説いている。

私自身、38年間の小・中学校勤務の内、23年間にへき地小規模校に身を置いた経験を持つ。それだけに、本書の言わんとする「パラダイム転換」論に、今大いに反省させられている。

玉井氏の原著『子どもと地域の未来をひらくへき地・小規模校教育の可能性』[教育新聞社、2006年]ともども、本書は現在の学校教育・学校経営・学級経営の在り方について根本的かつ重要な指針を示している。

[教育新聞社、2013年、2,095円]
(純真短期大学こども学科 平嶋一臣)